黒い星。

音無　無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い星。

【Ｎコード】
Ｎ８５４３Ｔ

【作者名】
音無　無音

【あらすじ】
主人公は彼女、ゆいと仲の良い生活を過ごしていたのだが――

今日は、あのマンションに花を持っていく日。
そう、今日は――――。

■　■

去年の今日、俺と彼女のゆいはあるデパートで買い物をしていた。
俺らの共通の友人がもうすぐ誕生日。
だから、一緒に買い物に来ていたのだ。
「ねえ、これがいいと思うなー」
「ダメだろ？女っぽいし」
「・・・・・・だよねえ、じゃあ、あたしが買おう！」
「なんだよそれ、ただのショッピングじゃん」
ゆいは「えへへ」と笑ってごまかし、レジに向かった。
ゆいがレジにいるとき、俺はふとあるものに目についた。
黒いチェックがおしゃれな時計。
値段は結構な高値だ。
（あんまり高値だと逆に怒るしな・・・・・）

「ただいま！」
あれ？と見ていた時計に目を向けた。
「それいいじゃーん！・・・・って高いね。怒られちゃう」
俺と同じこと思ってるし・・・・・。

そこの雑貨屋は諦める。

一階上に移動して、もう一軒の雑貨屋に入った。
ここは下よりも品揃えは悪いが、いいものが揃っている
――とのことだ。
もちろん、ゆい曰くだが。

「あ」

俺らは店に入り、まっ先に見つけた。
一見真っ黒い置物だが、逆さまにすると星が降ってくる代物。
「綺麗・・・・・」
「だな」
「ねえ、つーちゃん、黒大好きだし、これにしよ！」
「そうだな」
値段も上々。
これなら喜んでくれそうだ。
なにより。
友人の喜ぶ顔を思い浮かべ喜んでいるゆいをみて、
これにしてよかったと再度思った。

「えへへー、明日渡しにいこーっと！」
「休みだぜ？おしかけんの？」
「えー、でもでも、学校にもってって見つかったら怒られちゃうし・・・」
「押しかけて、邪魔されても怒られるぜ？」
「いいよ、あたしだから、怒られませーん」
「なんだそれ・・・・・」
俺は現実と心の中で嘆息した。

そのあとも、なんの変哲もなく日常が続いた。
引きこもりの友人も。
俺も。　ゆいも。
ゆい、も？

「ちょっと、淳！！テレビ見て！」
風呂上がり。
母が忙しく叫ぶ。
俺は渋々テレビに目をやった。
「――――・・・・・・・は？」

『今日未明、街中のマンションで飛び降りたをした少女が――』

頭が真っ白になった。
訳が、わからず。
俺は。　俺は、俺は？

『飛び降りした少女の名前は野々村ゆいさんで・・・・――』

「ゆ・・・・・・・・・・・い・・・・・・・・？」

『さきほど病院で息を引き取りました。“自殺”の原因を今――』

「あ、ああ、ああああああ！」
「淳・・・・・」
俺は玄関へ駆け出した。
病院へ、いかないと。
きっと、死んだはずがない！　生きてる、生きてる！

「淳、くん・・・・・」
病院へ駆けつけると、ゆいの両親が居た。
病室の前で、すすり泣いていた。
嘘だ、死んでない。
俺は勢い良く病室へ入るとゆいの――
“遺体”を、確認した。
確認せざるを得なかった。
白い布を被せられ、胸元で腕を組み静かに眠っていた。

“恋人を失う”

これが、真の、失恋だと。
俺は思った。

■　■

今日は、あの廃ビルに花を持っていく日。
そう、今日は――――
ゆいの命日。
引きこもりがちな友人、つーちゃんこと月野むあが外に出る唯一の日。
「なんで、自殺なんてしたんだろーな」
「自殺処理されたけど、本当は違う、ってあたしは思いたい」
「・・・・・・・・・・・・・」
「あのあと、見に行ったんだけど、

“あんたへの誕生日プレゼント”が落ちてたよ」
「俺、への？」
そうだ、そういえば、あの日から二日後は俺の誕生日・・・・・・。
「場所から推定して、降りたのは自室のベランダ。
――これ、プレゼント。」
それは、白い置物。
むあにあげたものの、シリーズ物だ。
黒い、粉が降ってくる。
そうか、これのキレイさに見とれて・・・・
「落としてしまい、衝動的に拾おうとした瞬間――」
やめてくれ、聞きたくない。
「・・・・・・・お前のと、色違い、か？」
「ノンノ。“あたしら”だよ。」
「？」
「さらにあのあと。ゆいの部屋を探った。」
俺へのプレゼントを出した反対側のポケット。
右側に手をいれ、出したのは灰色の置物。
「白と、黒が降ってくるよ」
むあは、「ん」と俺に押し付ける。
「ゆいの“それ”は、あんたがもってなきゃ、だめ」
俺に押し付けた反動で雪が降っていた。
「いいえ、あんたが持ちなさい」
「・・・・・・・・・・わーったよ」

――なあ、俺に教えてくれよ。

白い闇に降る、黒い星たち。

（後書き）

あんまり、男目線の恋愛小説って売ってませんよね。
どこかにいいのありませんか。
彼女が死ぬともっといいですね。　不謹慎。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8543t/

黒い星。

2011年10月3日11時18分発行